

## 事例 1

品川区立八潮南保育園

**テーマ設定の理由：**本園は1階施設ですぐに園庭に出られる環境があるため、園児は日々戸外で遊び、体を動かす楽しさを感じ、心身ともにすこやかに成長している。幼児クラスでは、縄跳びの回数を増やすことや、雲梯をはじめから最後まで挑戦すること、友達とタグゲットを楽しむなど、自分の力を試したり友達と共感したりしながら運動遊びを楽しんでいる。様々な運動遊びを経験することで、自分の体に関心を持ち、できることや楽しいことを増やし運動が楽しいと思える子どもに育てていく。

**活動名：**ボール遊び

**活動のねらい：**ボールが転がる特性を通して、いろいろな遊び方を楽しむ

**環境：**普段は多くの園児がいる園庭であるが、本時は使用の優先をしたことで、広々と場所を使えるようにした



### 【子どもたちの様子】

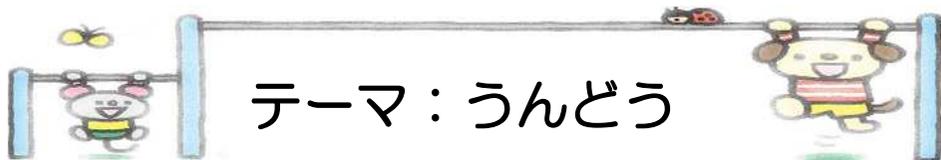
講師の先生と一緒に、ボールを投げる・取る・蹴る・転がすなど、いろいろなボールの遊び方の指導を受けながら遊んだ。

簡単な設定（課題）はすぐにクリアしているため、難しい設定にも挑戦した。

友達ができたことに歓声をあげたり、「すごい」と褒め、繰り返し遊んで楽しそうであった。翌日、ボールやフープを出してきてボールを投げたり輪の中に入れようとしていたりして前日に経験したことを繰り返して遊ぶ姿があり、設定を子ども同士で考えるなどの工夫もみられた。

### 【保育者の振り返りと気づき】

子どもと一緒に講師からの指導を受けた。子どもは、見本を見せたり指導したりすると、「やってみよう」と挑戦していた。その意欲は持続していて、気持ちを大切に行動できるようにすることが重要であると感じた。遊びの種類が多様で複雑であったり変わったりすることで「もっとやりたい」という意欲につながっていた。保育者は、子どもの興味が継続し、主体的に設定や遊びを工夫できるように援助していく必要がある。



## 事例 2

品川区立八潮南保育園

活動名：サーカスを見る

活動のねらい：サーカスの公演を見て、いろいろな体の動かし方や特異的な動きに興味をもつ

環境：いつも遊んでいる園庭が、サーカスの会場は普段と違う雰囲気レイアウトされた。迫力のあるサーカスを間近で見た

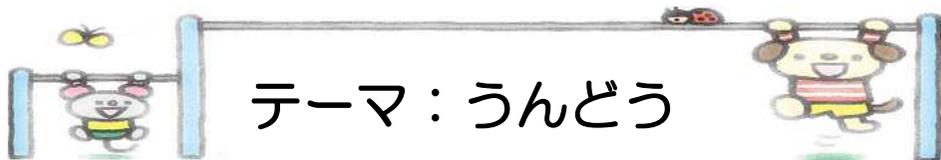


【子どもたちの様子】

「サーカスとは何だろう」という問いかけに、いろいろな反応と興味を示していた。実際に、いろいろなパフォーマンスを見ると「すごい」「やってみたい」と言っていた。見学の後は、サーカスで見た、ブリッジを真似してやろうとする子や鉄棒のぶら下がり、大縄跳びや短縄に興味をもってやってみようとする姿も見られた。公演には保育者が数名出演したことで、「先生すごい」と親近感もあり、自分たちも挑戦しようという気持ちがあったようだった。

【保育者の振り返りと気づき】

これまで、縄跳びや鉄棒に興味を示さなかった子どもが、公演をきっかけに「サーカスと同じようにできるかな」と言って縄跳びや鉄棒に興味をもち、取り組んでいた。保育者が一緒に遊ぶ、保育者も挑戦することが、子どもにとっては、保育者や友達と共有と共感ができていると感じたのではないかと思う。また、体を動かす楽しさを感じられるきっかけになったと感じる。



### 事例 3

## 品川区立八潮南保育園

活動名：なわとび ～ダブルダッチに挑戦～

活動のねらい：なわとびのいろいろな使い方や跳び方に興味をもち、やってみようという気持ちで跳んでみる

環境：ダブルダッチの公演を見学する。保育者は回し方の指導を受け、子どもが跳びやすいように回す



#### 【子どもたちの様子】

ダブルダッチの講師（チーム）による講演を見学すると、「すごい」「やってみたい」と感激していた。子どもたちは、講師が回す二本のなわとびに挑戦して跳んだ。講師と手をつないで一緒に跳んだり、跳び方のコツを教えてもらったりすると、すぐに跳べるようになる子どももいた。

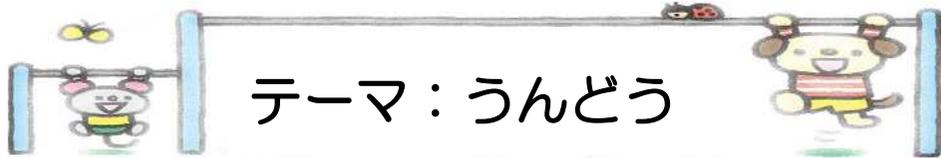
その後は、保育者が回して跳ぶ機会を作っていると、ダブルダッチで跳べるようになる子どもが増えていった。5歳児では、縄を回せるようになり、子ども同士で回して跳ぶようになった。

#### 【保育者の振り返りと気づき】

大人でも跳ぶことが難しいダブルダッチを、跳べるようになりたいという強い気持ちと意欲があった。保育者は、その気持ちに寄り添い、応援したり一緒に跳んだりして共感することができた。

このことをきっかけに、短縄の回数を数えたり記録表を使い友達と競ったりした。跳んだ回数が三桁を超え、子どもの運動能力が高いことを感じた。





## テーマ：うんどう

### 事例 4

### 品川区立八潮南保育園

活動名：巧技台

活動のねらい：様々な遊具を使って体を動かし、楽しさを感じる

環境：安全面に配慮して巧技台を複雑に組み立てる



#### 【子どもたちの様子】

巧技台の設定は、一見複雑に見えるが、子ども達は以前から経験していたこともあり、慎重に行動する場面と、ダイナミックにジャンプなどをする場面があった。友達とすれ違う必要があると、譲り合うか別の場所に移動するなどして、保育者が声掛けしなくても、一人一人が考えながら行動していた。「もっとやりたい」と言って、次回を楽しみにするようになった。

#### 【保育者の振り返りと気づき】

保育者は、巧技台の講師から実演および座学の講義を受けた。本園は以前から、アイランド式の巧技台あそびを取り入れていたが、講師の巧技台設定には、安全面への配慮と、自由に遊ぶための工夫がされていた。改めて、設定の意図や安全管理の視点を学び、実践していった。準備には時間を要するため、複数の職員で組み立てる必要があるが、保育者同士の共有もできた。

保育活動では、複雑に見える設定をすると、子ども達は慎重にはしご・一本橋渡りやジャンプなど、自由に遊んでいた。往路や復路がなく「自由」であることで、子ども達自身が本能的に安全に遊んでいたと考える。

自由さの中に主体的な子どもの行動を感じた。